俺が全員守ってやるよ

失敗成功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が全員守ってやるよ

【Ｎコード】
Ｎ６８９８Ｙ

【作者名】
失敗成功

【あらすじ】
いつも道理の日常を満喫していた立花（たちばな）　新（あらた）だったが、ある日の出来事で何もかもが変わってしまう。

プロローグ

目が覚めると真っ暗な世界に新は一人立っていた。

誰もいない。何もない。

目が覚めてから何分立ったのだろう。時間の感覚までこの世界にはない。

そんなとき、目の前に一人の人間が現れる。

布を被っていて顔はわからないが身長は新よりも低く、胸に膨らみがあったので女だと分かった。

そんな少女がにっこりと微笑み言う。

『お兄さん、一人なの？』

新は少女の言葉に答えようとするが言葉が出ない。

『元の世界、みんなのいる世界に戻りたいの？』

言葉が出ない新は頷いて見せる。

『そっか、戻りたいんだよね』

『だったら……を……ないとダメだよ』

少女は被っていた布を取り、そう言った

日常

「……ん、朝か」

カーテンのすき間から朝日の光がこぼれている。

目覚まし時計のアラームで目が覚めるはずだったが、どうやら今日はアラームで目が覚めなかったらしい。

目覚まし時計はすでに9時を回っており、1限目の授業が始まる5分前。

……走っても間に合わないよな。

そう思いはするが無駄と分かっていてもダッシュで学校に向かう。

途中、見慣れた背中が前を歩いている。

「今日も遅刻か？　沙菜」

「バカね。アタシはマイペースなのよ。学校の時間になんか囚われないわ」

「あーそうですか」

この、我が道を行く女子生徒は谷口（たにぐち）　沙菜（さな）

紅くて長い髪が特徴で胸はかなり大きい。これでもまだ成長は止まってないらしい。身長は新より少し小さいぐらいだった。新とは

幼馴染で家が隣りにある。

「なによ。新だって遅刻じゃない」

「フッ、何を言っている。沙菜に会うために今日は遅刻したんだぞ」

完璧だ。これで沙菜も俺に惚れちゃうな。

「それはどーも」

沙菜は顔色を変えずに言った。

「おいおい。今の言葉が胸にキュンと来なかったのか」

「新さあ、何回そのセリフ使ってんのよ。昨日も同じこと言われたんだけど」

「分かったよ。新しいの考えとくからさ、明日のお楽しみな」

「……まあ、いいけど」

沙菜はそっけなくそう言ったけど横顔が少し笑っているように見えたのは俺の気のせいか。

「あ、ところでニュース見たか。殺人鬼がまた事件を起こしたんだってな」

「ああ、そのニュースなら見たわよ。確か今回の被害者は８人って言ってたわね。なんでも誕生パーティで人が集まってるところで拳銃を乱射したとかなんとか」

「そうそう、しかもその事件が起きたのって隣町だってさ」

「え、そうなの。じゃあ、新は気を付けないとね」

「え、なんで？」

「だってアンタ、人に殺されそうな顔してるから」

……人に殺されそうな顔ってどんな顔だよ。しかも、笑いこらえながら言ってるし。

「新くーん」

新が沙菜の言葉にどう返そうか考えていると、いきなり新の後ろに誰かが抱きついた。

「おいっ、抱きつくなって、花蓮。　なんというかその……ない胸を背中に押し付けるのはやめてほしいんだけど……」

この新の背中にボインをヒットさせているのは草津（くさつ）　花蓮（かれん）

短い茶髪と、たぶん……おそらく成長期が来なかったと思う胸が特徴。新とは昔からの幼馴染でいつも新をからかっている。

「ほうほう、私の胸が新くんはないと言いましたが小さいだけで胸はしっかりありますよ。なんなら触ってみます？」

そう言って花蓮は背中から離れて新を見つめる。

「じ、じゃあ、お言葉に甘えて」

新は鼻の下を伸ばして花蓮の胸に触ろうとする。

「ってなにやってんのよ！」

「ゴハッ」

沙菜の素晴らしい回し蹴りで新は宙を舞う。

「沙菜……お、俺を殺す気か……」

まさか、殺人鬼って沙菜のことじゃないだろうな。この蹴りは殺人的だ。

「あ、そろそろ行かないとね。花蓮、行くわよ」

「はい」

沙菜と花蓮はその場に死体（？）を残して学校に向かった。

「……待って……くれ……ガク」

学校

二限目の授業終了のチャイムが鳴ると同時に新は学校にたどり着くことができた。

……長かった。本当に長かった。ここに着くまでの試練は凄まじかった。野犬に追いかけられるわ、マンホールの蓋が開いいて落ちそうになるわ……今日はついてないな……

「はぁー」

ため息をつきロッカーに靴を入れて上履きを履き、教室に向かう。

「あー、センパイ！　また遅刻ですか？」

不意に声をかけられる。

「『また』とはなんだ、『また』とは。俺は三日前と一昨日と昨日しか遅刻してないだろうが」

「……センパイ、それを『また』というんだと思いますけど……」

このちょっと口うるさい女子生徒は明瀬　優子。

長い金色の髪は思わず見とれてしまう。胸は山でもなければ平でもない、そんな胸だ。簡単に言えば
丁度いいくらいの胸だ。新とは学年が一つ違い、一年生だ。

「センパイ！　明日は遅刻しちゃダメですよ」

「ああ、分かったよ。ところで、そろそろ三限目が始まるけど行かなくていいのか」

「本当だ！　早く言ってくださいよ」

優子はそう言い残し自分の教室に向かって走り出した。

「転ぶなよー」

ま、こういう場合って注意しても転ぶんだけどね。

「イタッ」

新から見えなくなった辺りで優子は予想通り転んでいた……

教室に向かう途中、新はふと気づく。

まてよ、今って三限目やってるんだよな。今、普通に教室に入って行ったら完璧に不良に見られるかなぁ……

考えて新は一言呟く。

「屋上に行こう」

屋上なら誰もいないし、授業中だから先生が来る心配もないよな。

「あれ、立花くんじゃない」

「えっ」

いつの間にか新の後ろには保健の先生、さなえ先生がいた。

「こんなところで何をしているのかな」

銀色の長い髪と白衣がよく似合っていて、何とも言えない大人っぽさがある。

「えっと……ですね……」

やばい、なんて言えばいいんだ。まさか『いやー、ちょっと屋上でサボろうかなって思いまして』なんてこと言ったら殺されるかもしれない。

「何か言えないことでもあるのかな」

新を見る先生の目が疑いの眼差しに変わった。

どうすればいいんだ。何か言い訳を、何か思い出せ――

「実はですね。俺の舎弟が他の高校の生徒にボコられてるって聞いたんで、今助けに行こうかと思いまして」

しまった！　昨日読んでたマンガに影響されて――こんなの誰も信じないよなぁ。

「なんでもっと早く言わないのよ。さぁ、舎弟くんを助けに行きなさい。授業のことなら私に任せて」

と言い、楽しそうな顔で保健室へ歩いて行く。

信じてくれたのか？　あんなので信じる人いるんだね。それより屋上に行くか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6898y/

俺が全員守ってやるよ

2011年11月22日01時55分発行